

権利としての障害者スポーツ

## 特集

## 障害児体育の現状と課題

大宮 ともこ

## 要旨

障害児体育に関わる現場の教師や子どもの声をもとに、子どもの障害や認識に合わせた教材を用意せず、主体性を育てず、やらせる体育によって体育嫌いの子どもがうまれていること、教師も悩んでいること、特別支援学校等の教育環境の十分でないことを指摘した。背景には体育科についての戦前からの訓練主義的な考え、1960年代の職業教育的な体力づくりの体育観の影響もあり、能力主義的な学習指導要領にも問題がある。しかし、教科として運動文化が内包する文化的、倫理的、歴史的価値を掘り下げ、教育内容を再構成して体育の取り組みをつくっていくことが求められることは学校体育研究同志会などで確かめられてきた。その上で障害児体育では、障害がありつつも自分の身体に意識を向け、ともに競技する他者に意識を向け、パフォーマンスを発揮しつつ運動文化を享受するのであり、そのために子ども理解を深め、教材を工夫し、教師集団を築きつつ授業づくりをすすめるべきではない。

**キーワード** 体力主義、体育観、文化としてのスポーツ、魅力ある教材・教具、授業づくり

## はじめに

2014年我が国が批准した障害者権利条約では、スポーツが権利とされた。2017年文部科学省が定めた第2期スポーツ基本計画は、障害者スポーツの振興を掲げている。その第3章の2には「障害者をはじめ配慮の必要な多様な人々が、スポーツを通じて社会参画することができるよう、社会全体で積極的に環境を整備することにより、人々の意識が変わり（心のバリアフリー）、共生社会が実現されることを目指す」とある。2020年パラリンピックに向けて、保健体育の学習指導要領において新たに「パラリンピック」という文言が入った。文部科学省中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編には、「東京オリンピッ

おおみや ともこ  
日本福祉大学スポーツ科学部

ク・パラリンピック競技大会がもたらす成果を次世代に引き継いでいく観点から、知識に関する領域において、オリンピック・パラリンピックの意義や価値等の内容等について改善を図る」とある。同基本計画は、学校教育における障害者のスポーツの基盤整備策をも打ち出している。第3章の2の具体的施策として「全ての学校種の教師に対して障害者の運動やスポーツの理解を促進する」「特別支援学校等に障害者スポーツ用具等の設備を整備する」「学校における障害児のスポーツ環境を充実させる」などを挙げている。

しかし、成人障害者のスポーツ実施率は、障害のない人の半分以下と低く、「権利としてのスポーツ」の実現はほど遠い状況である。

また、多くの子どもたちが最初にスポーツに触れるであろう、学校体育の現場では、今なお体育嫌いをつくっている状況はなくなる。

障害児体育の実際から課題を捉えつつ、意味や価値について明確にし、今後の課題について提起

していきたい。

## 1 障害児体育の実際

著者は、30年余り神戸大学附属特別支援学校（知的障害を対象。以下、神大附属）に勤務して、体育の授業や運動会などの体育行事の創造に関わってきた。同時に学校体育研究同志会（以下、同志会）という民間教育研究団体に所属し、全国大会の障害児体育分科会や学習会などとともに学んできた。ここでは、体育に携わるたくさんの教師から出された話や筆者が実際に見学したことをもとに述べてみたい。

## (1) 体育嫌いの子ども

特別支援学校中学部・高等部に入学してくる発達障害の子どもたちの中には、「体育は参加してへんし、嫌い」と言う子どもが少なくない。「おもしろくないし、先生が偉そうで嫌や。やる気がせえへん」とも言う。彼らは体育の授業で、障害があるがゆえのわからなさやできなさ、辛さやしんどさをわかってもらえず、「わかってできる楽しさ」「自らの能力を仲間の中で発揮する心地よさ」を味わい、授業の主人公になることができないで、「できない自分像」をつくらされてしまっている。「わからなくてもよい」と言われ、本人にとって取り組む意味がわからないまま、体力づくりや運動量確保だけを目的にただ長い距離を走らされるなど、「させられる」からより嫌いになる。

同様の例は多い。攻防入り乱れるバスケットボールのゲームなどの授業では、人とボールが行きかう中で、困ってキョロキョロしている子どもがよく見られる。わかるようにしてほしいという子どもの声が聞こえてきそうである。持久走では、しんどくなって座り込み、教師に言葉をかけられるとより強固に拒絶して動かなくなる子どもの姿も目にする。根性で頑張れという教師への抵抗の姿なのだろう。わかりやすくてよいという理由でサーキットに取り組んでいるところも多いが、「見通しをもって」「主体的に」走るようにとカー

ドやシールなどを持たされて自閉症の子どもが真剣に何度も周回している様子を見ると、何に楽しさを感じているか疑問だ。ある肢体不自由校では、「これまで取り組んできたので」と、認識発達の高い車椅子の子どもたちに「右向け右、回れ右」など集団訓練が取り組まれている。これらは、子どもが「楽しそう」「やってみよう」と主体的に取り組んでいく体育とは言い難い。

## (2) 悩む教師

体育の担当教師と話していると、「何をしたらよいのかわからない」という悩みを口にする。確かに特別支援学校では、具体的に教材があるわけではなく、スポーツのバレーボールなどを少しアレンジして教えようとして取り組むが、子どもたちの実態から難しさにおつかる。また、体力主義や活動量確保の発想から、サーキットや持久走に取り組むものの、子どもたちに寄り添うと辛そうで難しい。かといって、何が良いのかかといってもそれを考える視点を持ち合わせずに悩む。

もうひとつ挙がってくるのは、教師同士の合意形成の難しさである。ベテランと呼ばれる教師の取り組みや価値観が教師集団に浸透していて、変えることが難しいと若い教師たちは言う。また子どもたちの主体性を大事にしようとしても、補助の教師たちが強引にさせてしまって、その場にいらなかったり、体育嫌いになったりする子どももいる。チームティーチングが困難なのだ。

こうした悩みは、筆者が特別支援学校の教師となった30年前と根本は変わっていない。

## (3) 各学校、年齢で大きく違う体育の取り組み

学校によっても、児童生徒の年齢によっても、また、特別支援学校か特別支援学級かでも学習集団の組み方や学習のあり方は大きく違っている。その学校の教育理念や目標及び方針、教育条件や指導体制などが大きく影響する。

特別支援教育制度実施（2007年）以降は、発達障害の子どもたちが急増し、特別支援学校の児童生徒数も増大し、特別支援学級の学級数も増え